
Eternally

小羽 朔夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E t e r n a l l y

【Nコード】

N 5 5 3 8 D

【作者名】

小羽 朔夜

【あらすじ】

「ねえ、永遠を信じてる？」貴方は永遠を信じてますか？貴方なりの答えを見つけて下さい。

黄昏。誰そ彼。そう呼ばれる時間帯。この図書館にも淡く夕陽が差し込み、本の背表紙も本棚も赤く染まる。その光景はまるで全てを炎に呑み込まれてしまったようで、失ってしまった気がして怖くなる。

そして、徐々に優しい紫色に変わるのを見て私は今日もまた安堵するのだ。

繰り返し、繰り返し。

まだ、これらは価値を失っていない。まだ、失ってしまったてはいない、と。

何時になつたらこんな自虐じみた真似を止めるのだろう。もう何回繰り返しただろう。何度も繰り返したせいで習慣になってしまったこの癖から脱することは出来るだろうか。これまた癖になってしまっている本日何度目かのため息をついた。

ふと、本棚から視線を少しずらしてみるとやはり彼がいた。中庭で相変わらず楽しそうに友達と騒ぎ合っている。今日はつつすらと雪が積もり、まだ降りやまないと天気予報でも告げていたのにこんな時、男の人がいつまでも子供だという世論に頷きそうになっってしまう。

きっとそのうち、いつものように。寒いと喚きながら図書館に押し入って来ることを思うと知らず知らずのうちに笑みが溢れていた。

「ねえ、永遠って信じてる？」結局いつものように指先や顔を寒さで赤くしながらストーブの前に陣取った彼が真剣な顔をして言ったその言葉が、本を読んでいた耳にもやたらと響いて聞こえた。しかし、それに返る言葉は聞こえてこない。訝しんで顔をあげればこちらを向いて返答を待っている彼がいた。

「私？」

「うん。ねえ、信じてる？」

「信じてると言えば嘘になるかな。どうして？」

「なんとなく？気にすんな。」

「そっか…」

彼の、この“なんとなく”の音がすんなり胸に染み入ったのが分かる。許容するようできて、理解を放棄しているような。本当に何気無く感じて何気無く言葉にしてみた感じ。

私みたいにごちゃごちゃ後から理由をくつつける訳じゃない。ありのままに述べた感覚。

それが“なんとなく”好きだった。

「いつ帰る？夕陽は沈んだけど。」

本当にこういうところは分かってやっていないようだから、余計にタチが悪い。つい、全部分かっていてやってるんじゃないかと勘繰りたくなる。

「んゝ、もう帰るよ。雪積もっちゃったし。」

「そっか、じゃあ俺はもう少しいるから。コケるなよゝ」

「うん、また明日。」

「お疲れゝ」

彼と図書館に別れを告げ、独り帰路に着く。雲が所々かかってはいるものの、もう空には星が瞬いている。そして光を反射して星に負けず劣らず煌めく雪の粒は中々やむ気配は無く、後から後から降り続けていた。

「永遠、ね…」

何故急にそんなことを聞くのだろう。理由は“なんとなく”であることは分かっているけれど。

永遠なんて、生き物には到底望めないモノに、なんで名前なんか付けてしまったのだろう。認識したところで手は届かないのに。いくら欲しかったところで絵空事に過ぎないのに。そんなモノは私には信じられない。

「な〜んか、追いついちゃった？ 珍しく歩くの遅いね。考え事？」 気付けば大分ゆっくり歩いていたらようであいつかれてしまっていた。

「ううん、坂が恐いから。冷たい思いも痛い思いも嫌だし。」

「一回転べば二回も三回も変わんないって。それに上見て歩いてる時点で危ないじゃん。」

「それ、転ぶのを期待してるって言うてるように聞こえるんだけど。」

「気のせい、気のせい。てか、俺のが転びそう。」

そう言いながらも器用にスピードは緩めずに下って行った背中が少しずつ小さくなっていく。かと思えば、彼はおもむろに立ち止まり振り返っていた。そして、私が追いつくのを確認して、また歩き出す。それを何度も繰り返し返したところで、やっと坂を下り終えた。

「ねえ、永遠を信じてる？」 今度は私が聞く。

「うん。何事もさ、信じることは大切だから。そこにあってもなくても俺は信じたいと思うよ。」

「すごいね。私は…、永遠なんて信じられなかった。信じたかった

けど、何もなかったから。すぐに壊れて失ってしまう気がしてた。
でも分かった。永遠は永遠じゃないんだね。」
「よく分かんないけど。まあ、いいんじゃない？」
そういうと彼は笑った。またあの、“なんとなく”の感じ。またひとつ永遠になった。

“永遠”は“永遠”だけど。自分の中で“永遠”にすれば良い。覚えていられるだけ、美化したり劣化したり、一人思い出してニヤケてみたり、懐かしく思っで。時には誰かに話しながら、少しずつ形は変わってしまったとしてもそんな風に大切にしていけば、それはきつと自分の“永遠”になるから。そして、それは未来の自分を支えてくれる筈だから。

「…ありがとう。」

「え？何が？」

「うん、なんとなく？」

「そっか。」

「うん、そう。あ、明日は夕陽が沈む前に帰るから。夜危ないし。」

「転ぶから？」

「今日まだ転んでないからっ！転ぶからじゃなくて、ほら不審者と
か…」

「ああ、危ないよね。此处に一人いるし。」

「うわ、ひどっ！」

「良かったね。」

「え？」

「…なんでもない。」

こんな他愛ない会話も何気無い時間もいつか、私を支える“永遠”になるんだろう。

（後書き）

どうしても書きたいKeyが“なんとなく”と“永遠”でした。場面は予め考えてあったにも関わらず、形にしてみたら何故か長くなっていました。

これから、送別シーズンですね。別れるのは辛いけれど、こう考えると少し貯金をしている気分が味わえるかと。それが私なりの答えです。

最後まで読んで下さりありがとうございました。感想など書いて頂けると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5538d/>

Eternally

2010年12月31日18時44分発行